山と博物館

第30巻 第12号　1985年12月25日　大町山岳博物館

落倉より唐松，五竜を望む　撮影 古幡和敬

私の冬山

初めて冬山に登ったのが今から十七年前になると思います。

それから今日まで正月はいつも雪山の中で楽しい山仲間と一緒に過ごすようになりました。今年も又、冬の岩壁をクライミングする準備を進めています。

なぜ冬がくれば雪山にとりつかれたかのように登るのかよくわかりません。

ただ好きだからでしょう。

最初の冬山は遠見尾根から五竜岳～鹿島槍ヶ岳東尾根のルートで、先輩達と一緒に縦走することができました。今の五竜遠見スキー場が開発される前でしたので、神城駅から四十五キロくらいのキスリングザックを背負って入山し、途中でザックの重さと斜面のきつさにまいってしまい、先輩達に帰らせてほしいと頼んだくらいつらい第一歩でした。

普通だったらこれで冬山登山をやめてしまう人が多いと思いますが、なぜか今日まで続いてしまい、自分でもおどろいているくらいです。今までに数十回の冬山登山の経験がありますが、内容も尾根から頂上へと、縦走とか、岩壁から縦走、いろいろなタイプの冬山山行を実践することができました。

中でも厳冬期穂高北尾根～槍ヶ岳～立山までのスキー縦走は私の冬山登山の経験のすべてを出しきって成功させることができました。あの時の苦しみやつらさ、楽しさは今もわすれることができません。

百キロの長い縦走路と厳しい岩登り、スキーを使って二十日間にわたって頑張り通したことは日々のトレーニングの積重ねだと自負しています。

これからも初心をわすれずに厳しいけれどあのすばらしい白銀の峰々を目ざして登り続けたいと思っております。

（大町山の会々員　降旗　厚）

大北地方を中心とした
餅と餅搗き慣習

青木　治

冠婚葬祭から正月、節句、十五夜などに、餅が使われたため、餅を搗く回数は極めてこの地方には多かった。補助食にも副食にもなり、また、保存食にもなったので一度に八升（一二ℓ）から一斗（一五ℓ）以上の糯米をふかして餅にし、神仏に供え家族で食べた。残りは長方形に切って板餅として保存した。

餅搗き道具は立臼と杵であるが、糯米を蒸す道具の蒸籠と釜も必要とする。臼も欅をくりぬいた木臼と花崗岩で作った石の立臼もある。杵も一本杵（一臼搗一本）と細くて軽い数本で搗く千本杵とがある。暮の餅搗きに小谷村戸土では、明治・大正・昭和初期までは五、六段から八、九段に重ねた木の重ね蒸籠を用い、ええ（共用）をして、若衆仲間五、六人で次から次へと廻りながら千本杵で搗いており、その餅搗き風景を自慢していた。一般には一本杵搗きが殆んどである。餅は食生活に変化をつけることや補助食・副食にもしたので、糯米だけの白餅の外、大豆、粟、黍、粃粉、青草（よもぎ、ちちこ（こぐさ、山ごぼうの葉））、栃の実、粳米などを混ぜていろいろな餅を搗く。

臼と杵　大町市北原
（撮影　昭29．1．15　青木　治）

この地方の名神大社である、国宝の仁科神明宮、流鏑馬祭の大町の若一王子神社、奴踊の小谷村中土の大宮諏訪神社をはじめとし、各村々の神社では、夏から秋にかけて、笛太鼓の音が美しく高らかに響いて、夏祭、秋祭が盛んに行われる。これ等神社の例大祭には必ず海山の種々の供物を神前に供える。この供物の中でその中心をなすものは、神酒と鏡餅である。この鏡餅の大きさは、その神社の格式、大小によって多少の相違があるが、糯米三升（五・六ℓ）から二升（三・一ℓ）を一臼とし、混ぜ物を入れない白餅として搗き、必ず両親のある者が、直接臼の中から取ることを本体とする習慣であった。正月のお飾りも同様な取り方であった。その一臼からは、下飾り（鏡餅大）上飾り（鏡餅小）二個とし、三宝にのせ神前に供える。昔から農山村の神社では白餅ときまっていたが、近頃市街地の神社では餅屋に頼むので、紅白の餅とするところもある。特に穂高神社の如く、古から鷲足膳があり、特殊神饌の一部として、三宝でなく、鷲足膳にのせ他の種々と共に供えるお宮もある。

この鏡餅の餅搗きは、臼と杵を清め、身内に穢れのない男女が、精進潔齋して搗くことが昔からの習慣であった。神社での鏡餅のお供えは、例大祭、神嘗祭、祈年祭とお正月の四回としている。

秋祭が終わる頃になると、次の餅搗きは、旧八月一五日のお月様に供えるお月見餅である。斗桝に藁のねじりさんばあてを入れ、その上に鏡餅二個（三個の家もある）をのせ、大根二本を添え、満月のお月様、仲秋の名月に、縁側、障子元、屋根、木の梢などお月様の見えるところに供える。またこの餅には餅取粉を付けるものではないといって付けない所もあるし、またお星様分として、小さい餅を四つ添える家もある。また昔の若衆達は「お月様に供えた餅を三組（三軒）分盗めば長者になれる」とか、「橋を三つ渡らずに盗めば、思うことが叶う」とか「長者になる」とかいって、盗み歩いたものという。

次の餅搗きは旧九月一三日の十三夜のお月見餅で、十五夜にお月様に供えぬ家でも、十三夜には必ず供えるものとしていた。供え方は全く十五夜と同じである。また十三夜のお月見のことを「小麦のお月見」ともいい、この夜天気が良ければ、来年は豊作であるという。この俗信は実は小麦の播種の適期を十三夜頃（太陽暦一〇月下旬）であることを示した言葉で、巧に十二夜と小麦の豊作と、その種蒔きの適期を結びつけた金言で、昔から精農は十三夜を中心に小麦蒔きをしている。

八月十五夜のお月見餅（旧暦昭54．8．15）

次の百姓の餅搗きは旧一〇月一〇日の「十日夜」の「案山子上げ」の時である。春、谷川の水が温む頃、谷川に沿って下って来た山の神は、苗代田に停り、田の神に変身し、ついで田植と共に本田に移り、やがて稲穂の稔りと共に、案山子の神様となり、稲田を守り、案山子上げと共に、再び谷川を遡上り、山の神にかえるが、どこの農家でも古くは、当日は案山子を門口に立てたり、案山子の笠を壊して餅搗きの火の焚付にしたり、搗き上げた餅は、十五夜や十三夜と同じように、斗桝に入れて、案山子の神様やお月様に供えた。中には斗桝にねじりさんばあてを二つ入れ、それぞれのさんばあてに、二個ずつ餅を四つ入

れ、案山子とお月様両方に供える家もあった。

これ等十五夜、十三夜、十日夜を「三月」といい、この三月の晴天を善し、また三月三度に渡って餅が搗ければ、来る年は思いごとが叶うといわれている。

また明治、大正の養蚕の盛んな頃は、晩秋蚕の上簇が終わる初秋の候、「しんのう招び（苦労招び）」と称し、作や蚕手伝いに来てくれた者に餅を搗いて、招待したり、配ったりした。

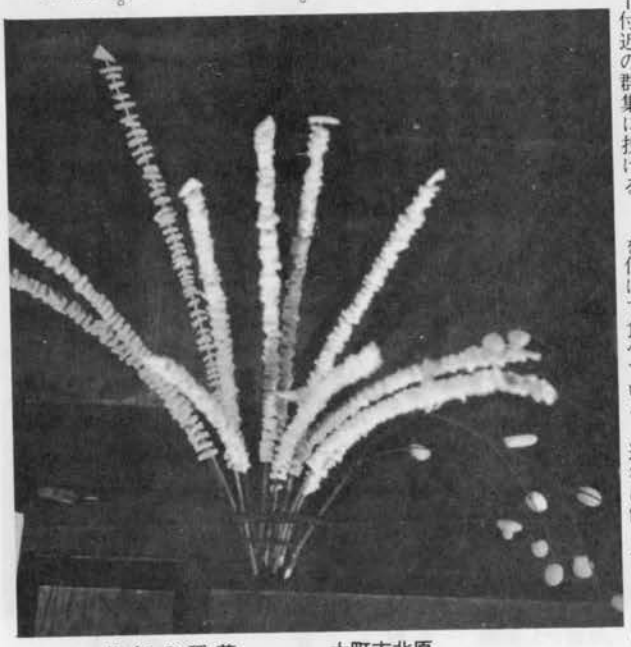
また人生儀礼の、生まれて最初の誕生日には、古くから何れの家でも誕生祝をしているが、ここで欠くことのできない品は、誕生餅である。里方のお祖母（嫁の母）さん、はね親（鉄漿親）、近親者達を招待し、餅を搗き酒食を共にしお祝いするが、南部平坦地方では丸餅を五個または七個の奇数個を風呂敷に肩掛けに背負わせ、箕の中に入れ、「粃は飛んで行け、実は残れ」といって三回箕をはぎるまねをしているし、佐野坂以北の北部方面では、餅を背負わせ、箕の中に手を持って立たせ、無理に歩かせ泣かせ「泣く子は育つ」という所もある。泣かない時は、無理に棒で突いてころばし泣かせる。

人生最大の節目の第一関門は結婚式である。いよいよ嫁（聟）が婚家に到着した時、最初に、嫁（聟）、一見客に上等の煎茶、上等のむし菓子二個、香物として、奈良漬かかりん漬を小皿に入れ添えて出す。次に嫁（聟）には永久に婚家に落ちつけることを願って、「落ち着きのおじや」か「落ち着きの餅」かを出す。落ち着きの餅はきな粉でまぶした餅か、或は雑煮餅かである。これは婚家に落ち着くことと、まずいおじやでも、餅でも、婚家の飯を一生食べることを意味する。一見客も相伴する。次いで三三九度の盃に移る

人の一生の最後の葬式の際にも、お供と称して、餅を仏に供える。子供、兄弟、伯（叔）母、本家分家関係、はね子、仲人子が供える。仏との関係の厚薄によって糯米で六升分、五升分、三升分としている。近頃餅の代りに、パン、まんじゅう、また供料として金員も使われることも多くなった。これ等の餅などは棚上げの時に参列客に配る習慣である。

佐野坂以北の北部では、不幸の餅の取り方として、六四個を取る。六四個のうち四九個を一臼で取り、一個は仏用として寺へあげる。別にやや大きめのかさの餅、ひさの餅を取り、その場で近親者と近所の人で食べる。残りの一三個は一三仏の餅として、近親者で分ける。会葬者には施主が餅を搗き全員に配る。餅のお供えについては、最近南部平坦地と同じようにする家もある。

家屋・橋の新築、屋根の葺替え等でも、そのお祝いに餅を投げる。家や屋根葺の場合は大工の棟梁（屋根屋）により、棟上げの当日家屋の上部に祭壇を作り、神酒と投餅（直径四cm位の丸餅）を供え、棟梁による神事が終わると、餅と日本紙に包んだ銅貨（昔は一文銭）を若干混ぜて、棟下付近の群集に投げる。大きな公共の建物や橋の新築の場合は、新築祝の一環として行い、その関係者によって用意された投餅は、長さ二・五尺（七六cm）、直径八寸（二四cm）位の新しい小俵を作り、投餅を入れ神前に神酒など共に供える。俵数もかなりの数にのぼる。神主により神前の儀、新祝の式典が終わると関係者により投餅の儀に移る。ベランダ等の高い所から五、六個ずつ群集に向って投げる。俵は残りの中味ごと投げる。その俵を拾えば縁起がよいという。



若年の稲花　大町市北原
（撮影　昭29．1．15　青木　治）

拾った人は良く家の入口の天井に吊し、魔除けにする。正月用の餅は暮の餅といい、一二月二八日か三〇日かに搗くを本体にし、二九日には「九（苦）餅」といって搗くことを嫌った。一年中で一番多く搗くのが正月の餅で、一軒で一〇臼から一五臼も搗くことが昔は自慢であった。臼の周囲に藁を敷いて搗かないと、「不幸の餅」（葬式の餅搗きには、敷きものはない）といって嫌う。正月二日には、新婚の夫婦は「桝形」餅を斗桝の大きさに切ったもの）を持って、唯一の土産として里方に年始に行く。

江戸時代の喰方事（大町市常盤清水文書）という古文書の、正月四日の朝食の項に「上餅七ツ、女五ツ、残り粉餅」また五日の昼食の項に「粉餅、折餅にしてしょうゆみ付」とある。古くから餅は、上餅即ち白餅と、粃粉を混ぜて搗いた粉餅があり、然も朝食、昼食などに御飯代りに食しており、しょう油の味を付けて食べている。近年は餅につけるものは、黄粉、餡類、醤油、味噌、砂糖等である。

暮の餅に次いで正月の若年（一四日・一五日）にも餅を搗き若餅という。その若餅は、若年の粥と共に食べたり、月の数（平年は一二個、閏年は一三個）だけ取り、神棚に供える。また当日は、その餅で稲花を作り、繭玉団子と一緒に柳やみづぶさの枝にさして飾る。稲花は藁や柳、みづぶさの細枝、竹のひごに搗きたての餅切れを二cmおき位に穀大に巻きつけるか、切って通すかし、尖端には三角形の小切の餅をさす。花数は一二、三本とする。

三月、一月遅れの節句には、お雛様に甘酒と菱餅をあげるが、菱餅は青色にした草餅と白色の粉餅とで腹合わせにし、菱形に切る。またお雛様を贈られた方では、桝形二枚に菱餅を載せて返礼とするが、その時の桝形一枚だけは、そのまま返す慣わしの所もある。

五月、一月遅れの節句の御馳走は餅と柏餅で、近所近親に初節句（特に男子）があると鯉幟、内飾り、大幟を贈る。その返礼には「ちまき」を配った。ちまきとは、餅を茅又は笹の葉に並べて包んだもので、今では略して手拭に「千萬喜」など染めたものを代用する。初嫁、初聟は、子供の有無にかかわらず、里方にもって行き、その近所、近親に配る。

また正月晦日と一一月晦日には晦日餅（晦日団子）を搗いて祝う。その外二月頃の氷餅、三月の節句（一ヶ月遅れ）頃の穀づくり等農家の生活には、餅を離すことが出来ない。

参考文献
○北安曇郡郷土誌稿（年中行事篇）
○北安曇郡誌五巻下　民俗・食生活（青木治執筆分）

（北安曇誌編纂委員）

秋田県におけるニホンカモシカテレメトリー法による追跡調査概報（2）

米田一彦

3　日周活動

昭和58年～59年に捕獲し、テレメーター追跡に供した10個体のうち、8個体について昭和58年11月10日～昭和60年1月6日の間に合計七五七九時間一四分のアクトグラムを採取し、そのうち読み取りのできた六七七九時間四九分について解析を行った。

活動のパターンを活発な動き、ゆっくりした動き、睡眠と3つに分けてその比率の月別変化や気象条件等の影響による変化の特異点を求めた。そのうち6頭分の月別の活動量は別表のとおり変化した。

全体的にみると、冬期には活動の増加が見られる。しかし、58年11月14日捕獲11.5才の雄（No3）については、8ヶ月間にほぼ同比率に3つのパターンが出現し、昼夜についても同様の傾向が見えた。このことは、草食動物は昼夜関係なく一定のリズムでの採食を必要としている結果と思われる。

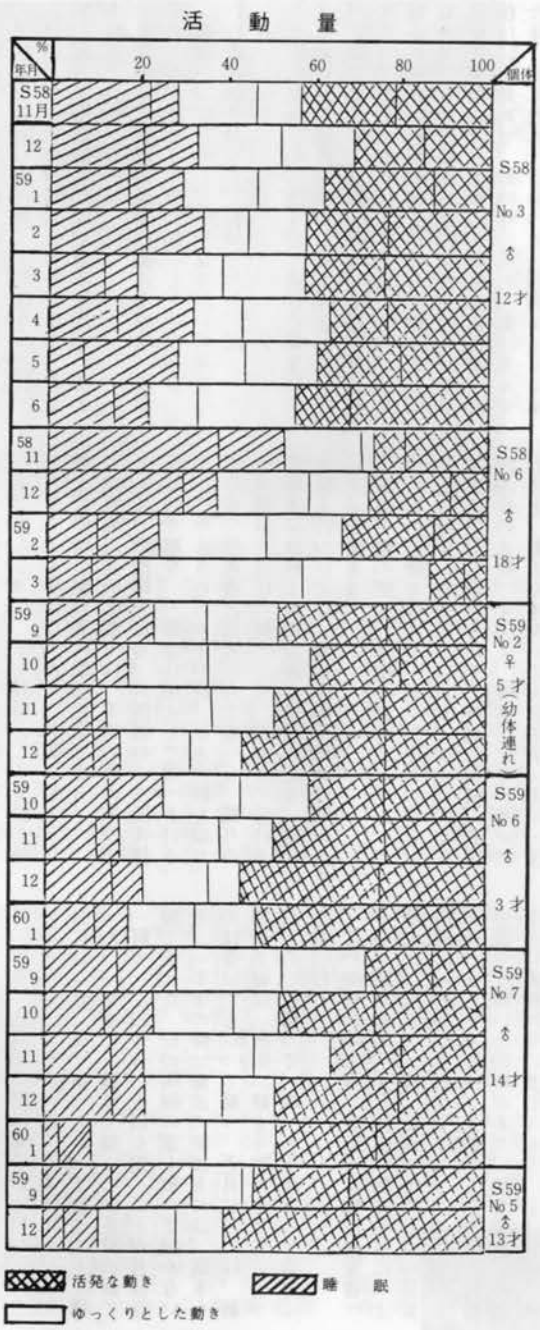
しかし、一方若い雄や雌成獣は、冬期に向かって活動量の増加が見られ、それに伴い睡眠時間の減少が見られる。これは、冬期間は餌の減少を活動を増やすことによりカバーしている結果に思われるが、下北等の報告では冬期には活動が減少するとあるが、テレメトリー追跡でのアクトグラムは、位置の移動を伴わない動きも首を大きく振ると激しい動きに記録され、この調査の限界と言える。しかし、現在これは目視記録とアクトグラムとの対比によりある程度補正が可能となってきている。

4　終わりに

カモシカのテレメトリー法による追跡調査は3年を経て、やっと緒に就いた感がある。その間17頭を捕獲し、うち成獣14頭にテレメ調査を供し、数万時間のアクトグラムを採取したが時間の制約から位置のテレメが不完全だったことを悔いている今日此の頃である。今後、益々画期的な調査が得られるよう期待している。

（おわり）

（秋田県自然保護課職員）



博物館だより

山岳資料寄贈さる

近代登山黎明の時、明治30年代後期～大正前期、高山植物研究家、山岳写真家として幾多の高山深谷に足跡を印すとともに、優れた業績を残した岳人・志村烏嶺氏の関係資料174点ご子息志村清美氏の篤志により当館へ寄氏贈されました。

資料中には烏嶺氏本人は勿論のこと、当時の登山思潮や風俗、山村生活を知るうえで貴重な資料が多数見うけられます。ここで幾つかご紹介します。

◇乾草植物標本40包◇　氏の新発見となったヒメウメバチソウ等を含み、大部分良好に保存されていました。

◇日本山岳会々誌◇『山岳』95冊◇第一年一号から第三十年二号までが完揃しています。

◇ウェストンの直筆序文◇　氏の著書『千山萬岳』のために贈られた紙数3枚の直筆の序文です。

◇文書類6点◇　特に『備忘』と印されたメモ帳等には、山行前の準備や、山岳界の動静の要点が散見され興味深いところです。

◇書籍類28冊◇　氏の著書で校正の施された『高山植物採集及培養法』の印刷見本、氏の新聞連載記事等を集めた『烏嶺文集』を含む山書が主体をなしています。

当館では近日中に、まず『山岳』初期号、ウェストンの序文を展示公開するとともに、本誌でも詳しくお知らせする予定です。

山と博物館第30巻第12号
一九八五年十二月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL㉒〇二一一
大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町
大糸タイムス印刷部
定価　年額一二〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三一九三）